

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻 英語教授学領域  
氏名 ラップ マイケル

【論文題目】 Learner Autonomy, Locus of Control (LoC) and Foreign Language Learning  
:Validation of the Structural Properties of Scores Hypothesized in the Kambara Locus of Control Scale (K-LoCS)  
(学習者の自律性、統制の所在と外国語学習  
-鎌原の統制の所在尺度における仮説としての得点構造特性の妥当性検証-)

【授与する学位の種類】 博士（文学）

### 【論文審査の結果の要旨】

本論文は、英語教育などにおける学習者の自律（learner autonomy: LA）と密接にかかわるデータ抽出手法である、鎌原（1982、1987）が開発したアンケート「統制の所在: LoC」(the Kambara Locus of Control Scale (K-LoCS) (18項目版および43項目（拡大）版、4件法）によって得られたデータを、心理測定学的（psychometric）観点から実証的に解析・検証したものである。研究にあたって、1125名の高校生からデータを収集し、得られたデータを確認的因子分析（CFA）および探索的因子分析（EFA）により解析している。併せて、定性的研究手法である「フォーカス・グループ法」を用いて、27名の大学生からグループディスカッション形式の発話データを収集し、計量的解析に質的解析を加えることで検証の妥当性を高めることを試みている。本研究は、LA研究において、先行研究に成功したものはほとんどないことを踏まえ、この分野の進展に貢献することを目指している。とりわけ、K-LoCS 開発当時は、EFAによる解析は行われていたにも関わらず、CFAによる解析は行われていなかったことに注目し、後者による解析をも導入することで、K-LoCS への修正提案や日本人英語学習者の自律研究に寄与することを視野に入れている。

第1章では、LAの種々の構成概念におけるLoCの意義やLA測定の難しさが述べられ、LA研究におけるLoC研究の意義、そして妥当性の高い測定の重要性が指摘されている。

第2章では、構成概念としてのLAの複雑さをOxford（2003）の包括的なモデル枠組みや分類の観点を含めて整理し、文化的相対性の問題、LoCが開発される以前のLAの計量的研究の限界や困難さを俯瞰している。その上で、LoCの構成概念や歴史的変遷について、英語教育を視野に入れつつ、内的（internal）および外的（external）LoCの違い、LAやLoCをめぐる海外や国内の研究動向を述べている。

第3章では、本研究が採用した計量的研究について、使用したデータ収集方法、被験者と手続き（得られたデータの正規性や信頼性の確認を含む）、CFAとEFAによる解析手順が記述されている。併せて、「フォーカス・グループ法」による質的研究の手順や被験者が適切に報告されている。

第4章では、結果について、K-LoCSデータの各項目について記述統計量が記述され、CFAおよびEFAを用いて、想定される4つのモデル（Models A、B、C and D）について解析している。なお、信頼性係数はクロンバック  $\alpha$  を用いて計算されている。併せて、「フォーカス・グループ法」によって収集したデータが集計・分析され、K-LoCSのアンケート項目について評価を行っている。

第5章では、統計解析結果について、4つのモデルの妥当性・信頼性を中心に考察するとともに、

「フォーカス・グループ法」によって収集した質的データについて考察している。さらに K-LoGS についての問題点および修正提案（アンケート項目の表現をよりよいものにする必要性、18 項目版の優位性）が議論されている。

第 6 章では、K-LoGS への修正提案や「フォーカス・グループ」法によって収集したデータから明らかになったことを念頭に、本研究のまとめが記述されている。定量的な CFA および EFA のみならず、定性的な「フォーカス・グループ法」を併用し、よりよい K-LoGS を開発する必要があると結論付けられている。

本論文は、構成・論旨は明晰であるとともに、K-LoGS を日本の英語教育において導入する際の留意点、また今後の K-LoGS のあるべき方向性を実証的に明らかにした意義は高く評価できる。

以上のことから、本論文が博士（文学）の学位を授与するための十分な資格を有していると判断した。

### 【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成 29 年 1 月 19 日(木)に、審査委員会委員 5 名の出席のもとに実施された。まず、本人から研究の学問的意義・位置付け、方法、主な成果の概要が英語で発表された。引き続き、日頭試間が行われた。本人は、審査委員から出されたすべての質問に適切かつ十分に答えることができ、本人が博士論文で対象とした研究分野や関連領域、また研究手法や得られた結果について十分な専門的知識と理解を持つことが確認された。同氏の博士論文は、心理測定学的アプローチによるデータ解析結果の英語教育などへの応用において重要な貢献となり得るものでもある。申請された学位論文が博士の学位の授与に値する水準にあると、審査委員全員の意見が一致した。

よつて、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

### 【審査委員会】

主査 アイズマンガー イアン  
委員 ラスカウスキー テリー  
委員 折田 充  
委員 サガズ ミシェル  
委員 片山 圭巳